



平治物語絵巻(模本) 六波羅合戦巻下(部分)

狩野養長 江戸時代後期(19世紀)

◆◆◆館蔵品紹介◆◆◆

鎌倉時代に描かれた「平治物語絵巻」は、合戦絵巻の傑作としてつとに名高い。源頼朝が平氏を討った「治承・寿永の乱(源平合戦)」に先立つ源氏と平氏の争い「平治の乱」を題材とし、ボストン美術館、静嘉堂文庫美術館、東京国立博物館にそれぞれ1巻と、計3巻が現存している。この他、別に2巻の存在が知られ、ここに紹介する新規蔵品の遠山記念館本(以下、遠山本と省略)は、実にこの2巻を写した模本である。

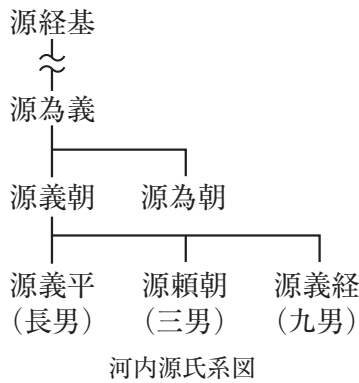
・「平治物語」と「平治物語絵巻」

まず、本作が題材にしている『平治物語』について確認したい。平安末期、京都の宮廷では皇位継承などに際して政争が行われるようになり、その最終的な解決に、源氏や平氏の軍事力が用いられるようになっていた。後白河天皇と崇徳上皇が争った「保元の乱」を経て、藤原信頼と信西(藤

原通憲)が争ったのが「平治の乱」である。

後白河上皇の院政下では、側近である信西が実権を握り、藤原信頼らの反発を招いていた。平治元年(1159)、信頼は信西を除くために源義朝と組み、平清盛が熊野参詣をしている機を狙って挙兵し、後白河上皇を誘拐し(三条殿夜討巻)、信西を殺害した(信西巻)。しかし清盛の帰京後に二条天皇は平氏の本拠地である六波羅へと脱出(六波羅行幸巻)。一時は平氏を潰走させた源氏方であったが(待賢門合戦巻)、清盛の出陣で源氏は敗退(六波羅合戦巻)、義朝は逃亡中に死亡、信頼は死罪となり、幼かった頼朝は伊豆に流罪となった。

鎌倉時代初頭に「平治の乱」を題材として成立したのが、軍記物語の『平治物語』である。文学作品としての脚色も多く、敗者となる源氏方の源義平(悪源太)が超人的に描写されているのが特徴である。



次に、本作の原本である「平治物語絵巻」について見てみたい。その名称の通り『平治物語』を題材にした絵巻物で、成立は鎌倉時代中期と考えられている。伏見宮貞成親王の『看聞御記』には、15世紀中頃の比叡山延暦寺西塔に、「保元絵」15巻と「平治絵」が秘蔵されていたという記録があり、その一部が現存する「平治物語絵巻」と考えられている。本来は「保元絵」と同様に10巻以上のセットであったと想定されるが、存在が確認される巻は次の5巻である（註1）。

- ・三条殿夜討巻 ポストン美術館蔵
- ・信西巻 静嘉堂文庫美術館蔵 重要文化財
- ・六波羅行幸巻 東京国立博物館蔵 国宝
- ・待賢門合戦巻 所在不明
- ・六波羅合戦巻 分割され一部が現存

このセットは室町時代から戦国時代にかけて散逸していき、江戸時代には「三条殿夜討巻」が西端藩本多家に、「信西巻」が伊勢山田家に、「六波羅行幸巻」が松江藩松平家に、「待賢門合戦巻」が松山藩松平家（久松家）に伝来していた。ただし「保元絵」の現存が確認されないことを考えれば、「平治物語絵巻」がこれだけ残されているのは稀有なことである。

絵画作品としては、武士や馬などの描写には勢いのある線描が見られ、躍動感のある表現を特徴とする。中でも「三条殿夜討巻」の邸宅を焼く火災の表現は、炎の表現として絵画史上極めて高く評価されている。また鎌倉時代という時代相を反映し、苛烈な戦争表現が見られる。「三条殿夜討巻」では、源氏の兵士が縁側の下に逃げた女房などを捕まえて、殺害して井戸の中に投げ込むといった残酷な行為が描かれる。しかし戦闘が終わった後は隊を整列させて撤収しており、戦争のプロである源氏の組織性までも描きだしている。

・遠山本の概要と筆者

続いて、遠山本の概要について述べたい。遠山本は先述の「待賢門合戦巻」の前半部分を1巻、「六波羅合戦巻」の全体を2巻に分けて写した計3巻セットとなっている。本紙の縦幅は43cm前後であり、これは現存する原本3巻とほぼ同一である。3巻は一具として木箱に納められており、箱の蓋表（図1）には「平治合戦繪巻／狩野養長蔵」の墨書がある。3巻それぞれの奥書に「狩野」の白文方印、「養長」の白文鼎印がある事から（図2）、狩野養長が描き、自ら所蔵していたものと確認される。



図1 蓋表

図2 奥書の印(原寸大)

筆者の狩野養長（1814～1875、凌霄華斎）は、肥後国熊本藩（熊本県）で細川家に仕えた、肥後狩野家の10代目の当主である。養長は江戸の木挽町狩野家9代・狩野養信（1796～1846、晴川院）に入門しており、「養」の字は養信から一字拝領したものである。江戸城普請の障壁画制作にも参加する、有力な弟子の一人であった。

養信は天保11年（1840）に弟子たちを西国へ派遣し、京都や奈良周辺で模本（粉本）を制作させており、養長も参加している。こうした模本制作は絵師にとって重要な学習手段であり、その模本を各家に財産として蓄積する目的もあった。弟子たちはその模本をさらに写して持ち帰り、転写が繰り返されていく。その中に、「平治物語絵巻」も含まれていたのである。

特に大名家から発注された合戦屏風には、しばしば「平治物語絵巻」が参考にされた。ただし彩色のある模本は少なく、本作のように多種多様な絵具をしっかりと塗った作例は特に稀少である。

・待賢門合戦巻

続いて「待賢門合戦巻」「六波羅合戦巻」の両巻について見ていきたい。源氏と平氏の本格的な戦闘が始まる待賢門合戦は、『平治物語』全体の転換点となるエピソードである。二条天皇に逃亡された後も、内裏には総大将を藤原信頼とする源義朝ら源氏の軍勢が籠っていた。そこに清盛の嫡男である平重盛が軍を進め、大内裏の東側に赤い軍旗を並べて取り囲む。これによって信頼らも出陣しようとするが、おびえた信頼は落馬して鼻血をながす醜態をさらし、その姿を義朝は「不覚人」と呼び捨てて戦場へと向かう。戦場となったのは陽明門、待賢門、郁芳門の三つの門で、特に待賢門で激しい戦闘が繰り広げられた。この時、攻め手の重盛の500騎に対し、義朝の長男である義平が17騎で戦闘をしかけ、超人的な活躍を見せるのが、『平治物語』の最高潮である。重盛の隊は潰走するが、源氏の主力がこれを追撃したため大内裏は平家方に奪取され、総大将の信頼は逃走するにいたる。

「待賢門合戦巻」の原本は、江戸時代には松山藩松平家（久松家）に伝わっていたとされるが、現在その行方は不明である。この巻は秘蔵されていたためか模本も少なく、東京国立博物館が所蔵する彩色模本が著名である（以下、東博本と省略）。また馬の博物館でも明治期の日本画家である小堀軯音制作の彩色模本を所蔵している。いずれも筆致と彩色の面で原本とは異なる趣きであり、対して遠山本は原本の筆致を再現しようという態度が

強い。東博本、遠山本のいずれにも詞書はなく、馬の博物館本は『平治物語』から補っている。

第1段は、内裏に陣取った信頼らの軍勢が描かれる（図3）。舞台となる紫宸殿の縁側は、画面を長くとり、左右に長大な広がりを見せ、表現する。建造物は「屋台引き」と呼ばれる定規を用いた直線で描かれており、遠山本の表現はよく原本の趣きを再現している。縁側中央の南階と周辺は、「紫宸殿」の額が掛かることから「額の間」と呼ばれ、本来は天皇が儀式に用いる特別な空間である。二条天皇に逃亡されて途方に暮れる信頼はここに座りこみ、広い空間との対比で放心の躰であることが表現される。

『平治物語』で信頼は、赤地錦の直垂に紫下濃の鎧を着ていたと記され、遠山本の彩色も原文通りである。しかしその左脇に侍る武士は、緑から赤に色変わりする鎧をまとっている。東博本ではこれが黒糸緞の鎧、すなわち源氏の重宝「盾無」の鎧をまとった義朝であることを表している。義長は他の場面では義朝を黒色の鎧で統一しており、義朝と判別できていない。また東博本では、紫宸殿の右下にも源氏の軍勢が控えているが、遠山本では槍霞がこの部分を覆っている。これも義長が参照した模本で、省略されていたためだろう。

第2段は、出陣の準備をする信頼、義朝らを描く（図4）。画面左に見えているのは、紫宸殿前の右近の橘である。落馬した信頼を義朝は冷淡に見下ろし、左隣には兜の緒を締める義平も描かれている。



図3 第1段 紫宸殿に座り込む藤原信頼(右から2人目)と源義朝(右から3人目)



図4 第2段 騎乗する義朝と落馬する信頼

第3段は待賢門を挟んで源氏と平氏が対峙する場面となる（図5）。待賢門を固めていた信頼が敗走すると、義平が救援に入る。門から画面右方向へと出てきているのは、義平に追われた平氏の一隊である。東博本ではこの続きに義平の部隊と内裏の建築が描かれるが、遠山本は待賢門で終わってしまっている。また門の右手前に描かれる軍勢は重盛のものであるにも関わらず、旗が平氏の赤旗

ではなく、源氏の白旗となっている。この部分は東博本でも赤旗となっており、やはり養長は場面の展開を把握できていない。

ここから養長が参照した模本が、東博本とは別系統の、より短いものであったことが推定される。また先述した義朝の鎧や旗の彩色に誤りがあることから、彩色のない白描模本であった可能性が高い。



図5 第3段 待賢門と平重盛の軍勢

・六波羅合戦巻

源氏と平氏が大戰闘を繰り広げる六波羅合戦は、『平治物語』全体のクライマックスとも言うべき部分である。重盛を追撃して平氏の本拠地である六波羅邸に攻め込んだ義平であったが、清盛自身が出撃して戦況を変え、戦の趨勢は平氏方と決してしまう。義平の撤退を見て敗北を悟った義朝は玉砕しようとするが、側近である鎌田政清らによって押しとどめられ、東国へと落ち延びる決断をする。その義朝の退却する時間を稼ぐために源氏の部隊が決死の防衛線を引き、多くの兵士が討ち死にする凄惨な戦闘が展開する。

絵巻の「六波羅合戦巻」の原本については、徳川将軍家に大和絵で仕えた住吉広行が「六波羅合戦粉本/不具着色已/失原本所在」(『倭錦』)と書き留めており、江戸中期にすでに所在不明であったことが確認される。近代に入り、西本願寺伝来の手鑑の影陰本『心画帖』(成好館、1890)に、詞書の断簡が確認された。さらに昭和19年(1944)に金沢から発見された画冊には14枚の断簡が貼られており、かなり細かく分解されたことが判明する。

このためこの巻については、模本の存在が重要である。模本類の奥書からは、元和3年(1617)に森井善太郎なる人物が模本を作成し、そこから転写が繰り返されたことが判明する。現存する作例は白描模本ばかりであり、彩色模本は横浜市歴史博物館本、早稲田大学図書館本、一場面のみの真田宝物館本があり、今回そこに遠山本が加わった形となる。

遠山本では1巻の原本を、上下2巻に分けている。上巻は第1段のみ、詞書をもたず、巻頭から巻末まで4mにおよぶ長大な戦闘場面が展開する。冒頭は六波羅邸で、清盛が鎧を身にまとい馬に乗ろうとしている場面から始まる(図6)。ここから清盛を中心に隊列を組んだ平氏の部隊が義平の部隊へと襲いかかり、六波羅邸より押し出す場面(図7)、鴨川の東岸に展開した源氏の防衛線を崩し西岸まで退却させる場面(図8)と、計3ヶ所に清盛が登場する。絵巻物が得意とする、物語の展開を視覚的に表す異時同図法である。『平治物語』において清盛は、紺色の直垂に黒糸緘の鎧と記され、原本では群青の絵具を用いていたことが、断簡(15頁参照)から確認できている。遠山本でも清盛の姿は群青で表されており、この群青が清盛を示す色彩として効果的に用いられている。

そして清盛の部隊が源氏を潰走させると、救援ら



図6 第1段 六波羅邸で鎧を身に着ける平清盛



図7 第1段 指揮をとる清盛



図8 第1段 源氏の固める鴨川に進む清盛



図9 第2段 戦況を見守る義朝

しき源氏の2騎が平氏の勢いに逆らうように、画面左から右へと駆け付ける所で上巻が終わる。

下巻に入り、第2段は詞書を記して、次いで義朝の本隊が三条河原で戦況を眺める場面を描く(図9)。黒い鎧姿の義朝を中心に4人が騎乗しており、その1人が玉碎を諫める鎌田政清である。

第3段は詞書を挟み、抵抗する源氏と蹂躪する平氏との、凄惨な戦闘場面が展開する。清盛の号令の下、平氏の赤旗が前進し(表紙場面)、破れた源氏の郎党は首を飛ばされるなど無惨な姿を見せる。騎



図11 第3段 戦場を離脱する義朝

馬同士の一騎打ち(図10)を経て、その続きには馬を画面左側へ向け、戦場を離脱する義朝の一行が描かれる(図11)。後ろを振り返る姿は、蹂躪される自らの軍勢の最期を見る表現だろう。同じく隊の殿しんがりで振り向き、惨状を目に焼き付けようとしているのは、義朝の侍童の金王丸こんのうまるである。

第4段も詞書を挟み、「三条殿焼討巻」に通じる火災の表現で、炎上する邸宅を描く(図12)。これは平氏によって火をかけられた信頼邸か義朝邸のいずれかであり、詞書では「感陽宮の煙乃ことし」と



図10 第3段 騎馬による一騎打ち



図12 第4段 焼き払われる邸宅

表現している。このように敗者の末路を描いて、「六波羅合戦巻」は幕を閉じる。

先述したように遠山本には3ヶ所に詞書が入っており、その文字は東京国立博物館の白描模本と酷似している。この内、第2段詞書（図13）は、先述した『心画帖』掲載の原本断簡（図14）と比較可能であるものの、筆跡は似ていない。この事から、遠山本は東博本と同系統の白描模本を用いたと結論付けられる。ただし東京国立博物館本にはもう一図、炎上する別の邸宅が描かれており、模本にいくつかの

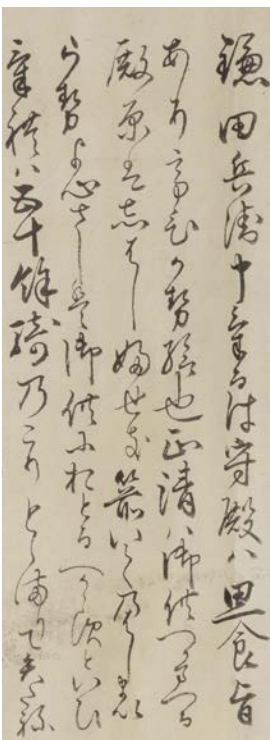


図13 第3段詞書

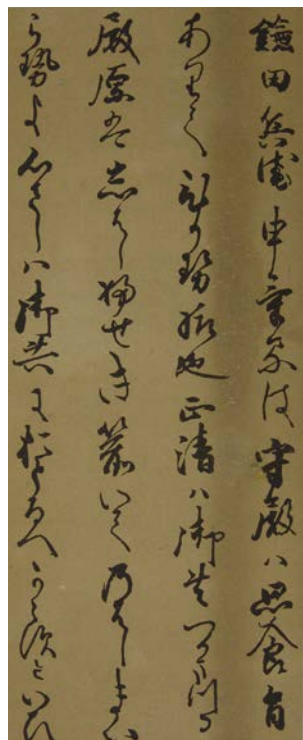


図14 同 原本断簡

バリエーションがあったことも確認されている。

・遠山本の位置づけ

最後に、遠山本の位置づけについて考えてみたい。遠山本は「平治物語絵巻」の中でも、行方不明の「待賢門合戦巻」、分断されてしまった「六波羅合戦巻」と、幻の2巻を写しているという点で貴重である。また清盛の鎧に用いられている群青などの絵具は高価であり、遠山本のようにふんだんに用いた模本は例が少ない。この事から、養長は遠山本の制作に、相当の熱意を持っていたことが読み取れる。

遠山本の制作当時、諸大名などの蔵に取まっていた原本の閲覧は難しかったはずである。しかし遠山本に見る原本を意識した筆致は、養長が原本のいずれかを閲覧していた可能性を示唆している。おそらく遠山本は木挽町狩野家の模写事業で原本を閲覧した養長が、「待賢門合戦巻」「六波羅合戦巻」の良質な白描模本を基に、合戦絵の幻の名品を復元しようと制作したものだろう。いわば現在で言う所の、「推定復元模写」に当たる（註2）。

とりわけ遠山本の「六波羅合戦巻」は、現存する模本の中で白眉と言ってよいだろう。特に筆致を原本に似せていることもあり、原本で達成されていた、軍勢が入り乱れた苛烈な戦闘描写を追体験することができる。そこからは「三条殿夜討巻」での非情な戦闘行為を行った源氏が、「六波羅合戦巻」ではかなく散っていくという、構成上の対比も浮かび上がる。「平治物語絵巻」全体で、このような無常観を描こうとしていたという構想も読み取れるだろう。

（依田 徹）

末尾ながら、本稿の執筆にあたってご助力を賜った金井裕子氏（東京国立博物館）、金子岳史氏（熊本県立美術館）、三宅秀和氏（群馬県立女子大学）、若林美樹氏（馬の博物館）に御礼申し上げます。

註1 この他に別系統とされる「常盤巻」がある。

註2 なお平成29年(2017)には、国際日本文化研究センターが、東京国立博物館所蔵の白描模本からデジタル復元を試みている。

主要参考文献

- ・岸谷誠一校訂『平治物語』岩波書店、1934
- ・松原茂・日下力・小松茂美『平治物語絵詞（日本絵巻大成13）』中央公論新社、1977
- ・日下力『平治物語の成立と展開』汲古書院、1997
- ・滝澤みか「早稲田大学図書館所蔵『平治物語絵巻 六波羅合戦巻』について」『早稲田大学図書館紀要』62、早稲田大学図書館、2015



(第三段)

鎌田兵衛申けるは守殿ハ思^旨食旨^旨ありて
ひかせ給也 正清ハ御供つかまつる殿原
はしはしふせき箭いてのはしまいらせよ
心さしは御供におとるへからすといひけ
れハ五十餘騎のこりと、まりて矢たねノ
あるかきり 心をひとつにしてふせきた、
かふノ両方こ、にておほくうたれにけり

(第四段)

信頼卿乃宿所三ヶ所并義朝か六条ノ堀河乃
家をやきはらふあひた餘盡數十ノ町をよ
ふ 感陽宮の煙乃ことし

外箱

表面 杉木地

寸法 縦47.0×幅16.8×高8.2cm

蓋表墨書「平治合戦繪巻ノ狩野養長藏」

備考 旧藏者の貼札に「第拾九號ノ長名先生ノ
戦國圖」の墨書、装潢師として「熊本俊芳
堂謹製」の印字あり。

①待賢門合戦巻

表紙：小花文錦 外題：「待賢門合戦繪巻」(金紙に墨書) 見返：赤染紙に金箔散らし 奥書：「狩野」(白文方印)、「養長」(白文鼎印) 寸法：縦42.8×横416.2cm



②六波羅合戦巻 上

表紙：小花文錦 外題：「六波羅合戦繪巻／上」(金紙に墨書) 見返：赤染紙に金箔散らし 奥書：「狩野」(白文方印)、「養長」(白文鼎印) 寸法：縦43.5×横441.9cm



③六波羅合戦巻 下

表紙：小花文錦 外題：「六波羅合戦繪巻／下」(金紙に墨書) 見返：赤染紙に金箔散らし 奥書：「狩野」(白文方印)、「養長」(白文鼎印) 寸法：縦43.8×横587.7cm



詞書

(第二段)

義朝たえずして西の河原へ引しりそ／きぬ
馬をひかへて申けるハいのちおし／からん
輩はこれよりすなはちおつへし／義朝は今
度かけ出なむ後は更に不／引して頸を馬の
はなにけさすへしと申を／正清のつゝきに
とりつきて只今御命を／すてさせ給て何詮
かあるへき東国へお／もむかせ給て御家人
相催て平家を／ほろほさむこと時刻をめぐ
らすへからす／と申てもるとともに落にけり



遠山邸意匠はどのように決められたのかを推理し、意匠化された家紋 $\text{\textcircled{〇}}$ を探ってみる

久保木 彰一

昭和8年から11年の遠山邸建設に際して、設計監督を務めた室岡惣七は、『遠山家本宅新築落成記念写真帳』に「落成所感」を寄せている。文中には家復興を意味する豪農の趣を表す東棟、東京からの接客用の設備を備える中棟、母堂の寛げる数寄屋造りの西棟と、それぞれの目的に応じた3様で設計した。社寺のような装飾は施してはいないが、材料の美と堅実で偽りない工法こそ、優秀な住宅の証しであると記されている。無事に竣工を迎えることができた設計士としての安堵と充実感がうかがえよう。

直営方式の建設であったが、建築主に代わって室岡の小会社である室岡工務所が工程監理や資材調達も行った。室岡の朝一番の仕事は、現場川島郷への搬入経路上にある木造橋を、重量物の庭石や、振動に敏感な米国製の大型ガラスなどをトラックで安全に渡せるかの確認であったという。特に、6、7トンはある鞍馬産沓脱石は、東京から荒川を遡上して搬入したと伝えられ、当時はまだ舗装されていない悪路がほとんどであったから、江戸時代の築城さながらの一大作業であったに違いない。

東京帝国大学工科建築科出身の室岡は、耐震などの構造設計も精密に行って、間取りや意匠にも反映させた。配置、平面、基礎、規矩、小屋伏、詳細図など35種の建築設計図・青図が幸運にも残されている。その中で内観の審美的な意匠に係わる、今風にいえば室内空間を設計したディテールとして、座敷床の間などの形を描いた3図がある。

- I. 遠山別邸設計図 中棟十五畳詳細 昭和8年7月6日
- II. 遠山別邸設計図 階上応接室 昭和9年1月19日
- III. 遠山別邸設計図 階上寝室詳細 変更ノ分 昭和9年1月19日

Iの中棟十五畳詳細図は現在の18畳大広間に当たり、IIの階上応接室とIIIの階上寝室は中棟の2階の部屋である。但し、この立面図で描かれた意匠の通りに施工されたわけではなかった。IIIの階上寝室詳細は「変更ノ分」とあり、変更前の図は不明な

がら、建築主の遠山元一と総監督を任された弟の遠山芳雄からの再考指示を受けて変更した図であろう。図1の左下立面図を見ると、円窓の左に掛け軸を掛ける間を開け、その下の棚は電熱器を入れると暖炉になるという独創的な修正案を、室岡は提示した。ところが、この案も気に入られなかったようで再検討になる。竣工時の寝室写真（図2）によれば、円窓の前奥行き3尺に床と暖炉、その左に洋服ダンスを配置した空間は、そっくりベッド

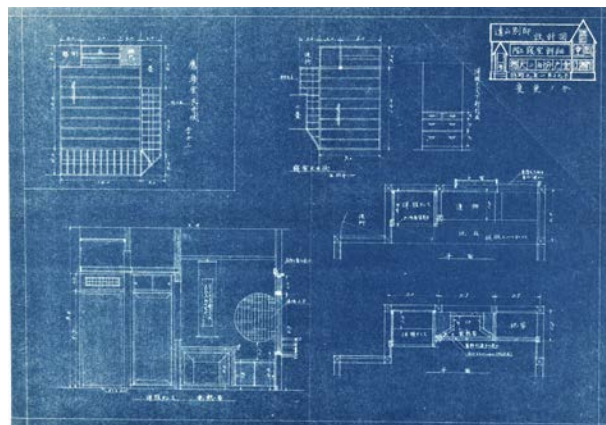


図1 中棟階上寝室 青図



図2 中棟階上寝室「遠山家本宅新築落成記念写真帳」より

スペースになっている。室岡プランとは全く違う方向に、建築主が希望する姿へと調整されたわけである。

この青図は昭和9年1月19日の作成であるから、東棟中棟の上棟2月15日まで、既に1ヶ月を切っていた。現場の工事準備と建築細部の設計と調整が同時進

行で進められ、大忙しであった様子が察せられる。

その後、昭和15年の朝香宮来臨時に、給仕用の裏階段を寝室外部の北側に増設することになり、寝室も北側へ9尺広げられ、さらにゆったりとした空間になって現在に至る。

Iの中棟十五畳詳細図については、『遠山記念館だより』第60号で触れたように、その床の間が現状に近い形にまで出来上がっていたが、これと同じ

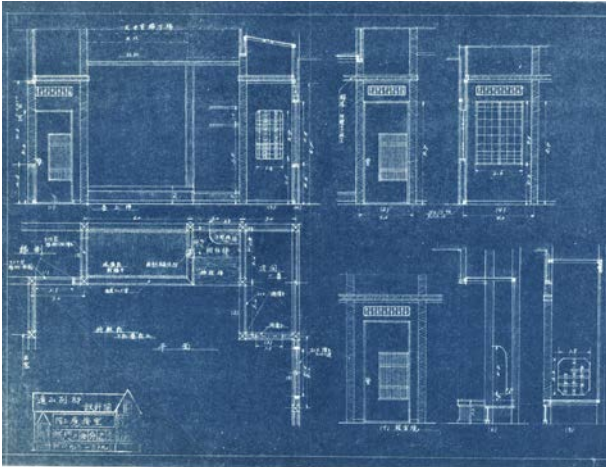


図3 中棟階上応接室 青図



図4 中棟階上応接室 (図2と同)

ように2階
応接室にお
ける床の間
の図面 (図
3) も、幾
つかの調整
を加えるだ
けで、施主

から大方の賛同が得られるまで仕上がっていた。始めから2階応接室は和洋折衷様式とし、柱や梁などの軸組が表面に見える伝統的な和室真壁の造りに、絨毯敷きであった(図3)。図面に出てこないが、テーブルと椅子、洋風の照明器具などのインテリアを取り入れ、和に洋風を加味するプランと思われるが、床の間明り採りの下地窓や、縦格子窓付きの戸襖ふすまドアには和様の印象が強目に出ていて、やや違和感があったのではない。

それが工事の始まる前後に桐一枚物の板3枚(内1枚は巾3尺もある桐鏡板)を入手できたので急遽設計変更をし、フランス製レバードアハンドルを付けて桐板ドアに仕立て、取り付けることにした。併せて、アールデコの電気照明器具、窓にオパールガラスを嵌め込むと、一気に洋風の雰囲気へ変化することになった(図4)。

遠山邸の主屋には床の間が8か所あり、詳細図面は中棟の大広間と応接室だけが残されている。西棟の床の間3か所については、詳細図はなかったのではなかろうか。それは室岡設計の床の間詳細図2図、及び円窓床・霞床のアレンジとも見える寝室意匠には、すっきりしないやや硬い雰囲気が感じられ、西棟の瀟洒な数寄屋床の間の現状とは通底しないものがあるように思われるからである。大工棟梁中村清次郎の好みに任せる施工に、意匠決

定のプロセスが変わったのかも知れない。

材木調達は、遠山芳雄と中村棟梁が関西方面へ探索に回り、評判の高い東京の篠田銘木店からの情報にも注意していたはずである。芳雄のセンスと行動力、中村棟梁の木の癖を読む能力と技、そして和洋の建築知識と生活設備にも気配りを怠らない室岡が加わり、3名それぞれが納得できるかたちを目指して、2年7カ月の建設工事が進められたように思う。

室岡の「落成所感」には、「早朝より薄暮に至るまで奮励努力し緊張の気場内に顕われ・・・木工其他何れの職の細部に就て技術的に考察するも口授せられては居りしかど施工するは初めてなりと称する仕法至る所に使用せられ」たとあり、各所の細部にまでしっかりと仕事が尽くされ、他でやらない技、意匠を試みる恵まれた建設環境であった。

では、一つの意匠である家紋を取り上げ、邸宅内のどこに加えられているかを確認し、どのような加飾意図、誰の発案なのかを探ってみることにしたい。

東棟表玄関から入り、続く畳廊下の左側に立てた襖は、大中小の団花文だんかもんを金銀2色で散らし風に刷った京唐紙である。大文様の中央に組み入れた丸に二つ引きが、当主の遠山家の家紋である(図5)。足利將軍家など武家に使用が多い。



図5 東棟廊下の襖模様

中棟へ進むと、次の間の前と右側押し入れなどに立てられた襖は、家紋から十字に杵きねを出し、花入り七宝しっぽう繋ぎの変わり紋を金銀泥刷りしている(図6)。家紋に気が付かな



図6 中棟廊下の襖模様

いくらい模様が控えめなのは、廊下側の襖裏面であるからで、表側には玄関控えの間に氷梅、上控えの間に竹林、次の間とその奥の大広間にめでたい若松の襖絵を描いて、気品ある接待空間を演出している。また、次の間と大広間の東南西3方に立てる明り障子戸の部屋外側の腰襖こしふすまには、鳥の子紙に

唐草をぼかし
刷りして、そ
こに金泥刷の
家紋を加えて
いる（図7）。



図7 中棟次の間明り障子の腰襖模様

大広間の
床の間左側、付け書院には、桐板を七宝花菱に透
かし彫りした超絶技巧の欄間が登場する。（図8）。

七宝文様の上段下段は陰陽反転し、その中間にも
う1列を斜め
に重ね、同じ
パターンを3
様に彫刻して
いる。中段
には家紋を
浮き彫りに
して（図9）、
丸と二の字の
隙間を彫金の
魚々子打ちの
ように刻み、
紋を浮き出さ
せている。目



図8 中棟大広間付け書院の欄間



図9 同上欄間の拡大

が粗い桐は、木肌がかさついて細かい彫刻は大変
に難しいと聞く。

貴顕の来客を接待するための大広間と次の間の
境にいたた箴欄間は、格式のある書院造りの形式
通りに装飾を入れない縦格子を組む。書院欄間の
方は塗縁で囲んだ桐材に、平安朝からの伝統の七
宝文様を細やかに彫刻している。家紋を加えたの
はここが最も重要な接客の場であるからに他なら
ないが、適度な大きさで抑え気味な入れ方は、床
の間、大広間、中棟、そして遠山邸全体へと統一
して流れる意匠の表現スタイルといえるだろう。

大広間周囲の様々な意匠は、前述の3名の誰か一
人の発想と見るよりも、お互いの案を出し合った
中から、一つに纏めていったように思われる。

さて、邸宅内の家紋をあと
三つ紹介しよう。一つは中棟
2階の14畳間の南西隅にある
陽当たりが良くサンルームの
ような3畳の小間の隅柱に付
けた電燈である（図10）。座
敷や廊下の照明器具はすべ
て特注品であったが、この

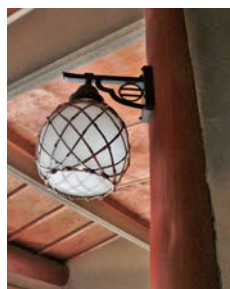


図10 中棟2階3畳廊下の
照明器具

持ち送り金物の中に家紋が嵌められている。この
ような目立たない所に、家紋が挿入された理由は
謎である。

二つ目は渡り廊下を進んで西棟に入り右手に出
現する、黒光
りする銀行の
ような金庫扉
である（図
11）。土蔵入
口に挿入した
防犯防火対策
の金庫扉で、
内部に収め



図11 西棟土蔵入口

た美術コレクションを護っ
ている。扉上部の左右に取
付けられたのは、平面が円
の甲盛りに膨らんだ合子形
で、艶消し鍍金した立体的
な家紋である（図12）。家
の大事なものを収蔵してい
る場所を示すために入れたもので、充分に目立っ
ている。



図12 金庫扉の家紋

三つ目は、西棟奥にある仏間に、当時活躍して
いた木工作家前田南斉が制作した仏壇の須弥壇で
ある（図13・14）。これは先祖を祀るからであろ
う。遠山元一は邸宅建
設に併せて、南斉に仏
壇以外にも仏間の前机
や照明器具、2階応接室
に備える島桑材の飾り
棚、愛子夫人使用の茶
道具と香道具を一括し
て注文した。家の儀式
用の調度ではないので、
どれにも家紋を入れて
いない。



図13 西棟仏間の仕込仏壇

これで邸宅内部は見終えたの
で、外へ回って建築外観を探し
てみよう。

遠山記念館へ向かう途中、田
舎の旧家の屋根に家紋付きの鬼
瓦があるのを目にすることがあ
る。武家の旗指物の家紋と同様に、その存在を周
囲に示せるよう、瓦葺きの屋根の棟両端に立派な
家紋入り鬼瓦を据えた。遠山元一も家の再興を記



図14 同上の須弥壇拡大



図15 中棟2階西側屋根の切妻上の鬼瓦

念して、このしきたりを踏襲したのである。

主屋の東棟は茅葺きなので鬼瓦はないが、三州
さんがわら 葺きの中棟は入母屋造りで、屋根の最も高い
いりもや 部分の水平な棟を大棟といい、そこから屋根流れ
すみむね くだりむね に沿って隅棟や降棟がおりて、それぞれの先端が
鬼瓦で止められる（図15）。家の周囲を調べると
24枚も家紋入りの鬼瓦が付いている（東日本大震
災で裏の北東側の降棟の1枚が落下して割れた）。

続く平屋の西棟は、西京瓦で葺き、鬼瓦は14枚
さいきょう である。図16の手前が西
いちもん 棟の御所型一文字鬼瓦、
しゅず 右奥が土蔵の数珠掛鬼面
また 跨ぎ鬼瓦2枚の内の片方
である。中棟の御所型足
付鬼瓦よりも更に大きい
のは、土蔵が富の象徴だ
からであろう。長屋門にも、
6枚の家紋入り鬼瓦が付く。



図16 手前西棟屋根と奥が土蔵
屋根妻側

屋根の周辺には、まだ
他にも家紋を見ることが
できる。軒先に付けた
あまどい 雨樋の雨水を下向きの
たて 豎樋へ流す集水器正面にも、
家紋が打ち出されている
（図17）。銅製の雨樋は板
金職人が作るが、経年変
化で緑青がふき、緑色の古色が美しい。家紋を入
れるだけでなく、軒先の集水器から建物壁に留め
る豎樋に渡すS字形の呼樋にも、曲がりながら細
くなるカーブと、側面に打ち出される古風な唐草
文に優れた手業が見られる。



図17 中棟1階東側の雨樋集水器

東棟表玄関車寄せには、雨の日に車から降りる
際、雨がかからないように茅葺き軒下から雨樋付
の銅板葺き庇がつけられ、その雨樋に家紋入り集
水器が3個付く。中棟は建物正面だけが家紋入で1
階2階に7個ある。数寄屋造りの西棟は雨樋も小振

りで軒の出が深くシャープなので、見栄えを考慮
したためか、集水器の家紋は省いている。

以上、屋外の家紋を見てきたが、数は多くても
空間が広がる外では、ほとんど目立たない感じで
ある。

この他、最も目に付くのは、遠山家が管理す
る非公開の墓地にある
棟門である。長屋門の
左へ濠に沿って進むと、
門扉の上部に巨大な丸
に二つ引き家紋を透か
し彫りする門前に入る
（図18）。1枚の檜板に浮
彫りと透かし彫りで紋
を表す（図19）。更に、
屋根には家紋付き経の
巻鬼瓦が、隣りの立浪巴
ぶたの可愛い飾り瓦と並
ぶ（図20）。白漆喰塀に挟
まれた伝統的で小さな
この門は、右側の間口10間
もある長屋門とは対照的
に、大切な場所を静かに
護っている。



図18 墓地の棟門



図19 同上門扉

最後に昭和11年竣工後
に加えられた家紋に触れ
る。一つ目は昭和19年
に屋敷地の北東鬼門に建
てられた稲荷社前にある
手水舎の鉢に陽刻されて
いる（図21）。



図20 同上屋根の鬼瓦

二つ目は、昭和45年の
一般公開時に建設された
美術館の入口ブロンズ扉
の表側左右八つ（左2段
目・図22）、内側に大きく
二つ浮き彫りで表される。家紋に陽光の放射と榎
の葉を十字に組んだ意匠は、建物と同じく今井兼
次の手になる。ガウディを始めて日本に紹介した
今井が、イエ
ズス会紋章を
参考にした装
飾性豊かなシ
ンボルマーク
である。



図21 稲荷社の手水舎の鉢



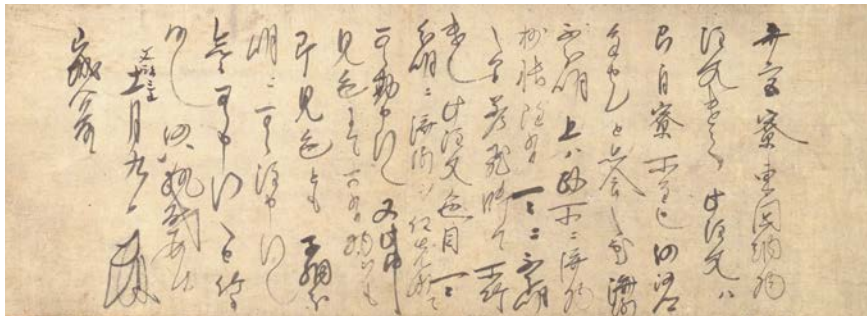
図22 美術館の玄関扉表側のレリーフ

テーマ展「源頼朝の時代 平治物語と源平合戦」

4月2日(土)～5月29日(日)

後援: NHKさいたま放送局

平安時代末期、源氏と平氏の武士団は京都宮廷の権力闘争の代理人として、天下の趨勢を決する存在となります。一度は平氏に敗れた源氏でしたが、流罪となっていた源頼朝が兵をおこし、平氏を破って武家政権を樹立するにいたります。この間の源氏と平氏の争いは、『平治物語』『平家物語』などで語り継がれ、文学のみならず美術の主題としても盛んに取り上げられました。本展では遠山記念館所蔵の重要文化財として知られる源頼朝「書状」に加え、土佐派の扇面絵の優れた作例である「源平武者絵」の36面すべてを公開します。さらに今回は、新出の狩野養長「平治物語絵巻(模本)」3巻を初公開いたします。この模本は行方不明の「待賢門合戦巻」、バラバラに切断されてしまった「六波羅合戦巻」を再現した、極めて上質な作品です。また特別に「六波羅合戦巻」原本の断簡(個人蔵)を展示しますので、会場で模本と表現を見比べていただけます。



源頼朝 「書状」文治3年(1187)11月9日 重要文化財



土佐派「源平武者絵(義経坂落)」36面の内
江戸時代前期 17世紀



象彦「片輪車螺鈿蒔絵手箱(模造)」
昭和時代初期 20世紀



「頼朝石橋山合戦蒔絵衝立」
大正～昭和時代 20世紀



狩野常信「宇治川先陣争図」
江戸時代前期 17世紀

特別公開

『平治物語絵巻 六波羅合戦巻（断簡）』

今回、個人蔵の『平治物語絵巻 六波羅合戦巻』の断簡を特別公開いたします。今回展示する模本のようにかつては長い絵巻物でしたが、江戸時代から所在不明となっており、昭和期になって小さくカットされた状態で14枚が発見された内の1枚です。平清盛が大きく配された重要なカットで、原本においても群青の鎧と黒い馬が、清盛を表す重要な特徴であったことが確認できます。原本ならではの迫力のある筆遣いをご堪能ください。

『平治物語絵巻 六波羅合戦巻(断簡)』
鎌倉時代 13世紀 個人蔵



会期中のイベント

○特別講座「平治物語絵巻と合戦絵の系譜」

Zoom開催

日時：4月29日(金・祝) 午後1:30～3:30

講師：土屋 貴裕 (東京国立博物館絵画・彫刻室長)

参加費：無料 定員80名(先着)

○土曜講座「頼朝の時代の文化と美術」

Zoom開催

日時：5月7日(土) 午後1:30～3:30

講師：依田 徹 (当館学芸課長)

参加費：無料 定員80名(先着)

お申し込み用アドレス：tkkk@e-kinenkan.com

上記アドレスにメールで「イベント名・お名前・電話番号・参加人数」をお知らせください。折り返し当館から招待メールを送らせていただきます。

コレクション展

6月11日(土)～9月25日(日)

2022年は、当館の創設者である遠山元一の没後50年にあたります。今回は「円文様カットガラス碗」をはじめとする遠山記念館の中近東コレクションの名品に加え、橋本明治による元一の肖像画、また元一が長女貞子のために誂えた衣類などを選んで展示いたします。



トキ像
エジプト 第26王朝 前664-前525



円文様カットガラス碗
イラン ササン朝 6-7世紀



紫地藤扇模様単衣(吉田貞子旧蔵品)
昭和時代初期 20世紀 (展示期間：6/11～8/7)

●遠山家端午の節句飾り 4月13日(水)～5月8日(日)

遠山元一が長男一行(大正11年生)の初節句の祝いとして揃えた、端午の節句飾りです。毎年、雛壇飾りと同様、遠山邸の中棟大広間の次の間に飾られます。その中には、人間国宝の二代平田郷陽や京都の大木平蔵など名工の作品も含まれ、鎧兜を中心に、鍾馗、神武天皇、日本武尊、応神天皇、源為朝、加藤清正・本多忠勝など勇猛な姿の人形や飾り馬、また金太郎をはじめ、子どもの姿を表した愛らしい人形などが並びます。



*本年度の遠山邸中棟2階公開については、新型コロナウイルスの感染状況を見て判断し、ホームページでお知らせいたします。

●ご来館のみなさまへ●

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、以下の点にご協力をお願いいたします。

- ・37.5℃以上の熱のある方、咳・咽頭痛などの症状のある方は、ご来館をお控えください。
- ・ご入館時の検温、ならびにマスクの着用をお願いします。
- ・館内にアルコール消毒液を設置しておりますので、手の消毒に使用してください。
- ・混雑緩和のため、展示室への入場を制限させていただく場合があります。
- ・館内では、会話を控えめにし、周囲の方と距離を保ってください。
- ・作品、展示ケース、壁や柱などにはお手を触れないでください。

利用案内

◇入館料

	一般	学生
特別展	1,000円	800円
通常	800円	600円
邸宅、庭園のみ公開	600円	400円

※中学生以下は無料、団体20名以上は2割引

◇開館 午前10:00～午後4:30(入館は午後4:00まで)

◇休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は翌日)
及び4月12日(火)、5月10日(火)

◇邸宅、庭園のみ公開(展示替期間)

5月31日(火)～6月10日(金)

9月27日(火)～10月7日(金)

◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。

URL <https://www.e-kinenkan.com>



電車・バスでのご来館の場合

- 東武東上線・JR埼京線 川越駅
 - 西武新宿線 本川越駅 ●JR高崎線 桶川駅
- いずれも「川越駅～桶川駅」間の東武バスで牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合

- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより 第62号 2022年3月発行

編集発行 公益財団法人 遠山記念館
編集担当 依田 徹

〒350-0128埼玉県比企郡川島町白井沼675
TEL: 049-297-0007 FAX: 049-297-6951